

日常生活と現代社会の相互作用 —— 資本主義社会における疎外と再生の可能性 ——

李 為

目 次

1. はじめに
2. 日常生活の社会的視点
3. 日常生活批判の理論
4. 現代資本主義と日常生活
5. 中産階級と疎外
6. 言語と記号の支配
7. 日常生活の変革とその可能性
8. まとめに

1. はじめに

社会学の視点から見た日常生活の研究は、現代社会の諸問題を理解し解決するための重要な鍵である。日常生活は、単なる個々の行動や出来事の集積ではなく、社会全体の構造や価値観を反映し、それを再生産する場である。アンリ・ルフェーヴル（Henri Lefebvre, 1891-1991）の理論は、この日常生活の重要性を強調し、資本主義社会における疎外（alienation）のプロセスを解明するものである。本稿では、ルフェーヴルの理論を基盤に、日本の具体的な事例を交えながら、現代社会における日常生活の変革とその可能性について述べていく。

まず、日常生活の社会的視点について概観する。日常生活は、個々の人々が経験する日々の活動や相互作用の総体であるが、その背後には社会の構造や文化が深く関与している。ルフェーヴルは、日常生活が社会の矛盾や問題を凝縮した場であり、そこでの変革が社会全体の変革に繋がると主張している。彼は、資本主義社会において日常生活がどのように疎外されているかを明らかにし、その解放を目指すための視点を提供している。

次に、日常生活における言語と記号の支配について考察する。ロラン・バルト（Roland Barthes, 1915-1980）¹⁾の記号学は、言語と記号が文化や社会の意味を構築し、権力関係を再生産する役割を果たすことを示している。日本においても、広告やメディアが社会の価値観やライフスタイルを形成する重要な役割を果たしている。例えば、1980年代のバブル経済期には、高級ブランド品や高価な

1) バルトは、記号学を通じて文化や社会の意味構築のメカニズムを分析した。特に、広告やメディアがどのように社会的な価値観を広め、再生産するかに焦点を当てた。

不動産の所有が成功の象徴とされ、消費文化が広く浸透した。このような消費文化は、資本主義の論理に基づいており、人々の日常生活を疎外させる要因となっている。

さらに、現代資本主義と日常生活の関係についても考えてみよう。資本主義社会では、効率と利益の最大化が重視され、労働者は長時間労働や過労に耐えることが求められている。日本の労働環境では、多くの労働者が精神的・肉体的な健康を損ない、家庭生活や個人の創造性が犠牲にされている。働き方改革は一部の改善をもたらしているが、根本的な変革には至っていない。労働者が自分の時間をより自由に使い、仕事と生活のバランスを取ることができる環境を整えることが今後の課題である。

日本社会における格差の問題も日常生活の疎外と密接に関連している。1980年代以降、非正規労働者の増加に伴い、賃金格差が拡大し続けている。特に、新型コロナウイルスの感染拡大は、階級格差をさらに広げる副作用を引き起こした。旧中間階級やアンダークラスが大きな打撃を受け、経済的困難に直面している。このような格差の拡大は、日常生活の質を低下させ、人々の生活をさらに疎外させる要因となっている。

しかし、日常生活の変革には多くの可能性が秘められている。地方創生の取り組みは、地域コミュニティの再生と個人の生活の質向上に寄与している。地域おこし協力隊やIT企業の誘致、観光事業の推進などを通じて、地方に新しい活力をもたらす取り組みが進められている。また、教育改革も重要であり、学生たちが主体的に学び、自らの興味や関心を追求できる環境が整えられている。これにより、学生たちは実践的なスキルや問題解決能力を身につけることができ、将来の社会を担う人材として成長することが期待される。

さらに、都市農業やサードプレイスの普及、リカレント教育の推進など、日常生活に新しい価値を提供する取り組みも注目されている。都市農業は、都市住民が自然と触れ合い、持続可能な生活スタイルを実践する機会を提供する。サードプレイスは、家庭でも職場でもない第三の居場所として、リラックスしながら交流や創造的な活動を行う場を提供する。リカレント教育は、社会人が生涯にわたって学び続けることを支援し、スキルアップやキャリアチェンジの機会を提供する。

日常生活の変革とその可能性について、ルフェーヴルの理論は、日常生活の中に潜む資本主義の論理を批判的に捉え、その中から新しい可能性を見出す視点を提供している。この理論を実践に応用することで、より自由で創造的な社会を構築するための手がかりが得られるであろう。日常生活の質的向上は、個人の幸福と社会全体の豊かさを両立させるための鍵であり、現代社会の課題を解決するための重要な視点である。

2. 日常生活の社会学的視点

社会学の歴史を通じて、日常生活の研究は多くの社会学者によって行われてきた。例えば、ゲオ

ルク・ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918)²⁾ は現代都市の日常生活を観察し、社会の複雑さと個人の相互作用を詳細に述べていた。ジョージ・ハーバート・ミード (George Herbert Mead, 1863-1931)³⁾ はシンボリック相互作用論を提唱し、個人が社会的なシンボルを通じて自己を形成する過程を明らかにした。アルフレッド・シュッツ (Alfred Schütz, 1899-1959)⁴⁾ は現象学的社会学のアプローチを用いて、個人がどのようにして日常生活の意味を構築するかを分析した。アーヴィング・ゴッフマン (Erving Goffman, 1922-1982)⁵⁾ は「演劇理論」を通じて、日常生活における自己呈示のプロセスを分析し、社会的な舞台での個人の役割を強調した。ハロルド・ガーフィンケル (Harold Garfinkel, 1917-2011)⁶⁾ のエスノメソドロジは、日常生活の中で人々がどのようにして社会的秩序を維持するかを具体的に考察した。

日本においても、戦後の高度経済成長期における都市化とそれに伴う日常生活の変化は、多くの社会学者の関心を集めた。例えば、1950年代から1970年代にかけての日本の都市化は、農村から都市への大規模な人口移動を引き起こし、都市での新しい生活様式が形成された。この時期には、テレビや冷蔵庫などの家電製品が普及し、家庭生活のあり方も大きく変わった。これにより、日本の家族構造やコミュニティのあり方にも大きな影響が及んだ。都市における生活の変化は、通勤時間の増加や労働時間の長時間化など、日常生活のリズムにも大きな変化をもたらした。

長い間、主流の社会学は実証主義や構造機能主義といったアプローチに重きを置き、日常生活を重要なテーマとして扱わなかった。実証主義者たちは、社会の客観的で普遍的な法則を探究することに注力し、日常生活の具体的な経験や微細な相互作用を無視しがちであった。構造機能主義者たちは、社会の秩序やシステムの機能に焦点を当て、日常生活の役割を軽視していた。しかし、20世紀の中頃から、日常生活が社会学の重要な研究対象として再評価されるようになった。エリ阿斯・カネッティ (Elias Canetti, 1905-1994)⁷⁾ やピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu, 1930-2002)⁸⁾、ミシェ

2) ジンメルは、社会が個人間の相互作用によって構成されるという視点を持っていた。彼の社会学理論は、日常生活の中での小さな相互作用が、社会全体の構造にどのように影響を与えるかを探求することに重点を置いている。

3) ミードは、シンボリック相互作用論の創始者の一人として知られている。彼は、人間がシンボルを通じてコミュニケーションし、社会的現実を構築するプロセスを強調した。シンボルの使用は、人間の意識と自我の形成に不可欠な要素であり、社会的相互作用の基盤となっている。

4) シュッツは、日常生活の中で個人がどのように意味を構築し、社会的現実を理解するかを現象学的な視点から探究した。

5) ゴッフマンは、日常生活における相互作用を「演劇」に例え、個人が社会的な場でどのように自己を演じ、呈示するかを分析した。

6) ガーフィンケルは、日常生活の中で人々がどのようにして社会的秩序を維持し、再生産するかを具体的な事例を通じて解明した。

7) カネッティの『群衆と権力』は、群衆の心理と行動を理解するための重要な視点を提供している。彼は、群衆の力がどのように発生し、支配者がそれをどのように利用するかを示し、権力の本質について深い洞察を提供し、現代の群衆行動の理解に寄与している。

8) ブルデューの『ディスタンクシオン』と『実践感覚』は、現代社会における社会的階級と文化資本の関係を理解するための重要な理論的枠組みを提供している。彼の研究は、社会的実践がどのようにして階級差を再生産し、維持するかを明らかにし、社会学の分野において画期的な貢献をしている。ブルデューの理論は、教育や文化政策の研究においても広く応用されている。

ル・フーコー (Michel Foucault, 1926-1984)⁹⁾ といった理論家たちは、日常生活を通じて社会構造や権力関係を理解しようとした。彼らの研究は、日常生活が社会の現実を構築し、再生産する重要な場であることを示している。

日本でも同様の動きが見られた。例えば、戦後の高度経済成長期には、都市化と共に日常生活の研究が進展した。高度成長期の都市生活では、住宅環境の変化や労働時間の長時間化、通勤時間の増加などが人々の日常生活に大きな影響を与えた。これらの変化は、家族構造や地域コミュニティのあり方にも大きな変革をもたらし、社会的な関心を引いた。具体的な例として、郊外への居住地の拡大とそれに伴う通勤ラッシュ、家電製品の普及による家庭内の役割分担の変化などが挙げられる。これらの変化は、家族の絆や地域社会のつながりにも影響を与え、現代日本社会の日常生活の多様な側面を浮き彫りにした。

日常生活の社会学的研究は、現代社会を理解する上で不可欠である。日常生活は、個人が社会的な役割を果たし、社会の中で自己を形成する場であり、また社会的な規範や価値観が最も直接的に体験される場でもある。日常生活の中で、個人は社会の矛盾や問題に直面し、それに対処するための戦略を見出す。現代日本においても、日常生活の研究は重要である。例えば、高齢化社会における介護問題や、少子化による育児環境の変化、働き方改革による労働時間の短縮といったテーマは、日常生活の視点からの分析が求められる。これらの問題は、日常生活の中での個人の経験や感情、行動を通じて理解されるべきものである。

ルフェーヴルは、現代社会における日常生活の中での私生活と公共生活の区別に関する疎外問題を強調している。彼の視点によれば、日常生活の様々な対象の技術化と機械化が個人の存在を技術に巻き込み、日常生活の同一性と閉鎖性を強化している。

この過程で、私的領域の私的化と同一化が「私的」と「公共」を区別する。例えば、家庭の浴室が公共の浴室に取って代わるような現象がこれに当たる。

現代のメディア技術、特にラジオやテレビは、私生活の中で大量の公共生活に関する情報を提供するが、ルフェーヴルはこれらを真の知識ではないと考える。これらの情報は、個人に事物に対する実際の力を与えるものではない。人々は公共の事件に実際に参加しているわけではなく、無力であり、持っているのは虚偽の意識、準知識、非参与に過ぎない。

ウォルター・リップマン (Walter Lippmann, 1889-1974) は、人間の頭の中にある現実のイメージについて重要な指摘をした。彼によれば、そのイメージは現実を正確に映し出すものではない。むしろ、単純化され、歪められたものである。リップマンはこれを「疑似環境」と呼んだ。マス・メディアの報道には時間や紙面の制約がある。そのため、ニュースを伝える際に省略や誇張が行われるこ

9) フーコーの『監獄の誕生』と『性の歴史』は、権力と知識の関係を理解するための重要な理論的枠組みを提供している。彼の研究は、社会制度がどのようにして個人を監視し、規律するかを明らかにし、現代社会の権力構造を理解する上で不可欠な視点を提供している。フーコーの理論は、刑法学、性科学、政治学など、さまざまな分野において広く応用されている。

とが多い。この結果、人々が社会を見る目にゆがみが生じてしまう。リップマンは、マス・メディアがステレオタイプ、つまり固定的で画一的な見方を助長すると主張した。さらに彼は、「世論の大半は、少数の型にはまったイメージの集まりでしかない」と述べた。

この状況下で、「私的」なものは依然として欠乏の状態にある。人々がマス・メディアを通じて公共の世界に関する知識を持っていると錯覚するとき、彼らは私的と公共の間の溝が表面上克服されたいと思込む。しかし、これは単なる錯覚に過ぎない。

ルフェーヴルの分析によれば、日常生活の中の個人は、意識形態の欺瞞の中でその疎外状態に気付かず、日常生活は現代の無意識となる。一方で、道具的理性とそれが主導する現代技術と政治制度は、この無意識を通じて日常生活の支配と疎外を実現している。

重要なのは、私的領域と公共領域が本質的に分裂しているわけではないという点である。私的生活と公共生活の溝は、本体論的な非二元論を基礎とし、派生的な政治問題である。これは、圧迫と不平等を含む無意識の統一に基づく意識レベルでの議論であり、日常生活の普通の人々が真の意味で意識的に公共生活に参加し、積極的な影響を与えることができていない現状を示している。

3. 日常生活批判の理論

アンリ・ルフェーヴルの日常生活批判理論は、日常生活が社会の深層構造を反映し、同時にそれを再生産する場であることを明らかにしている。彼は、日常生活が単なる個々の活動の集積ではなく、社会全体の矛盾や問題が凝縮される場であると考えた。特に、資本主義社会においては、日常生活が疎外のプロセスを通じて支配されているとする。ルフェーヴルにとって、疎外とは、人間が自らの本質や能力を外部の力に奪われ、支配される状態を意味する。これは、消費社会において顕著に現れる。

ルフェーヴルの理論は、マルクス主義の疎外概念に基づいている。マルクスは、労働者が生産過程で自らの労働力を商品化し、その結果として自らの労働の産物に対して疎外感を抱くと指摘した。ルフェーヴルは、この疎外の概念を日常生活全般に拡張し、現代社会における個人の生活全般が資本主義の論理に組み込まれていると論じた。彼は、消費社会が個人の欲望を操作し、その欲望を資本主義の生産と消費のサイクルに組み込むことで、個人の本来の欲求や自由が抑圧されると主張する。

ルフェーヴルはまた、日常生活が高度に機械化され、規格化されることで、個人の創造性や自発性が失われることを懸念していた。彼は、現代社会における時間と空間の管理が、個人の生活を機械的で画一的なものにし、日常生活の質を低下させると指摘する。時間の管理は、労働時間の厳格な規制や、余暇時間の商業化を通じて行われ、空間の管理は、都市計画や住宅環境の規格化によって実現される。これにより、個人は自由な時間と空間を失い、機械的で効率重視の生活に追いやられる。

日本においても、日常生活の疎外は戦後の高度経済成長期から現代に至るまで進行してきた。この時期には、物質的な豊かさがもたらされる一方で、消費社会の価値観が浸透し、人々の生活が消費活動によって規定されるようになった。高度経済成長期には、テレビ、冷蔵庫、洗濯機などの家庭電化製品が普及し、日常生活の利便性が向上したが、同時に新たな消費欲求が生まれ、それが資本主義経済のサイクルに組み込まれる形で人々を消費活動に駆り立てた。

現代では、疎外の問題はますます深刻化している。例えば、長時間労働や過労による「過労死」問題は、働くことが生活の中心となり、個人の健康や自由が犠牲にされる疎外の一例である。多くの企業で長時間労働が常態化し、労働者は過度なストレスにさらされている。働き方改革が進められているが、根本的な解決には至っておらず、労働者の生活の質は依然として低いままである。また、就職活動における「就活ストレス」も、若者が自己を商品化し、市場の論理に従って自己をプレゼンすることを強いられる疎外の一形態である。

さらに、デジタルメディアの普及により、日常生活の疎外は新たな形態を取っている。SNSやスマートフォンの利用が一般化する中で、人々は常に情報にアクセスし、他者とのつながりを維持しようとする。しかし、これらのデジタルツールは、しばしば表面的な交流や自己表現を強化し、現実の人間関係や自己の内面を軽視させる結果となっている。例えば、SNS上での「いいね」やフォロワーの数が自己評価の基準となり、それによって個人の自己価値が左右される現象は、デジタル時代の疎外を象徴している。

ルフェーヴルは、日常生活の中での疎外に対抗するためには、日常生活の質的向上が必要であると主張する。彼は、創造的な活動や自己表現、コミュニティの再構築を通じて、日常生活を豊かにすることが重要であると考え、地域コミュニティの再生や、働き方の多様化、趣味や文化活動の振興など、日常生活を豊かにする取り組みが求められている。例えば、地方創生の一環として行われている地域おこし協力隊の活動や、ワークライフバランスを重視した働き方改革、アートや音楽、スポーツを通じた地域文化の振興などが挙げられる。

地方都市では、過疎化や高齢化が進行しており、地域コミュニティの崩壊が懸念されている。しかし、一部の地域では、若者が移住し、新しいコミュニティを形成する動きも見られる。こうした動きは、ルフェーヴルの提唱する日常生活の質的向上の一例であり、地域の再生と個人の自己実現を両立させる可能性を示している。例えば、岡山県の美作市では、地域おこし協力隊のメンバーが地元の資源を活用した観光事業を展開し、地域活性化に貢献している¹⁰⁾。このような取り組みは、地域の社会的結束を強化し、住民の生活の質を向上させるだけでなく、外部からの新しい視点やエネルギーを地域にもたらすことにもつながっている。

ルフェーヴルの日常生活批判理論は、現代社会における疎外の問題を深く洞察し、日常生活の中にこそ社会変革の可能性があることを示している。日本の事例を通じて、日常生活の疎外とその克

10) <https://www.city.mimasaka.lg.jp/soshiki/kikaku/jouho/sogokikaku/kyoryokutai/6133.html> (美作市, 2024年7月1日)

服の方法を具体的に考察することは、現代社会の課題を解決するための重要な視点となるであろう。日常生活の質を向上させることで、個人がより自由で創造的な生活を送り、社会全体が豊かになることを目指すことが求められている。ルフェーヴルの理論は、日常生活の重要性を再認識させ、現代社会の問題を解決するための実践的な指針を提供している。

こうした理論の背景に照らして、「持続可能な発展」(Sustainable Development) という概念も注目されている。しかし、実際の取り組みは玉石混交であり、SDGs は「大衆のアヘン」という批判もある。経済成長優先の近代化を前提とし、環境破壊や格差を容認しながら持続可能性を追求する姿勢には限界があると言える。しかし、SDGs が世界的な関心事となったことは、人類が抱える課題の深刻さを示している。単なる理想に終わらず、批判的な視点を持ちながら具体的な課題解決に取り組む実践が重要である。資本主義の枠組みの中で何ができるのか、新しい価値観をどう創造するのかといった点で、社会学的なアプローチがますます重要となる。次では、現代資本主義社会において、ルフェーヴルの理論がどのように適用されるかを具体的に見ていく。

4. 現代資本主義と日常生活

現代資本主義と日常生活は、密接に結びついており、資本主義の原理が人々の生活に深い影響を与えている。資本主義は、効率と利益の最大化を追求する経済体制であり、その影響は消費行動、労働環境、家庭生活、さらには人間関係にまで及ぶ。特に、消費社会の発展とともに、日常生活の中での消費活動がますます重要な役割を果たすようになっていく。ルフェーヴルは、資本主義社会における疎外が日常生活全般に浸透し、個人の創造性や自発性を抑圧していると主張する。彼の理論によれば、疎外とは人間が自らの本質や能力を外部の力に奪われ、支配される状態を意味し、消費社会がそのプロセスを加速させる役割を果たしている。

現代資本主義において、消費は単なる物質的な満足的手段にとどまらず、個人のアイデンティティ形成や社会的地位の象徴として機能している。広告やメディアは、消費を通じて自己実現を図ることができるというメッセージを絶えず送り続けており、人々は消費を通じて自己を表現し、他者との関係を築くようになっていく。これは、物質的な豊かさが重視される現代社会の特徴であり、資本主義の論理が日常生活の隅々にまで浸透していることを示している。

日本は、戦後の高度経済成長期から現代に至るまで、消費社会の影響は顕著である。高度経済成長期には、家電製品や自動車の普及により、物質的な豊かさが急速にもたらされた。この時期には、「三種の神器」と称されるテレビ、冷蔵庫、洗濯機が家庭に普及し、生活の質が大きく向上した。しかし、これに伴い、消費活動が生活の中心となり、物質的な所有が幸福の基準とされるようになった。このような消費社会の価値観は、今日に至るまで継続しており、日本社会における消費行動の根底に資本主義の論理が深く根付いている。

消費の影響はさらに多様化している。例えば、ファッションや美容、エンターテインメントなど、

多くの分野で消費が自己表現の手段として位置づけられている。特に若者世代において、SNSを通じた情報発信が普及し、消費行動がオンライン上での自己表現と結びついている。ブランド品の購入や流行の追求が、自己の価値を高める手段として機能しており、消費活動が社会的ステータスの象徴となっている。

さらに、労働環境においても、現代資本主義の影響は顕著である。日本の企業文化では、長時間労働や過労が問題となっており、効率と生産性の追求が労働者の生活に大きな負担をかけている。バブル経済期には「24時間戦えますか」というキャッチフレーズが象徴するように、企業戦士としての労働者像が称賛された。しかし、このような労働環境は、労働者の健康や家庭生活に悪影響を及ぼし、近年では過労死やメンタルヘルスの問題が社会問題として認識されるようになった。働き方改革が進められているが、根深い企業文化の変革には時間がかかるため、依然として課題が残っている。

また、資本主義は家庭生活にも影響を及ぼしている。現代社会では、共働き家庭が増加し、家庭内での役割分担や育児のあり方が変化している。保育サービスや家事代行サービスなどの市場が拡大しているが、これもまた資本主義の論理に基づくものである。家庭内の労働が外部化されることで、家庭生活の質が向上する一方で、家族間のコミュニケーションや共同作業の機会が減少するという側面もある。

さらに、資本主義の影響は、都市生活と地方生活の格差を広げる要因ともなっている。都市部では、商業施設やサービスの集中により、消費が生活の中心となりやすい。一方、地方では、過疎化や高齢化が進行し、地域経済の衰退が課題となっている。地方創生の取り組みが進められているが、都市と地方の格差を解消するには、持続可能な地域経済の構築が求められる。例えば、農産物のブランド化や観光資源の活用など、地域の特色を生かした経済活動が重要である。

もしこれからの日本社会が豊かさから貧乏へと変わるならば、資本主義の影響はどのように変化するだろうか。まず、消費社会の価値観が大きく揺らぐ可能性がある。物質的な豊かさが減少することで、消費を通じた自己表現や社会的地位の追求が難しくなり、人々は新たな価値観を模索する必要があるだろう。物質的な所有に依存しない幸福の追求が重要となり、コミュニティや人間関係の再評価が進む可能性がある。

労働環境にも大きな変化が予想される。豊かさが失われる中で、効率と利益の最大化を追求する従来の企業文化は持続不可能となる可能性がある。代わりに、持続可能な働き方やコミュニティに根ざした経済活動が求められるだろう。労働者の健康と生活の質を重視した新しい働き方が模索され、地域経済の再生が重要な課題となるだろう。

家庭生活においても、資本主義の影響が見直されることが予想される。物質的な豊かさに依存しない生活スタイルが求められる中で、家族や地域コミュニティのつながりが再評価されるだろう。家庭内での役割分担や共同作業が重要となり、コミュニティの中での支え合いが生活の質を向上させる鍵となるだろう。

ルフェーヴルは、資本主義のもたらす疎外に対抗するために、日常生活の質的向上が必要であると主張している。彼は、創造的な活動やコミュニティの再生を通じて、個人が資本主義の枠組みを超えて自由に自己を表現できる環境を整えることが重要であると考え、日本においても、地域コミュニティの再生や、働き方の多様化、趣味や文化活動の振興など、日常生活を豊かにする取り組みが進められている。前述したように、地方創生の一環として行われている地域おこし協力隊の活動や、ワークライフバランスを重視した働き方改革、アートや音楽、スポーツを通じた地域文化の振興などが挙げられる。

現代資本主義と日常生活の関係を深く理解することで、資本主義がもたらす課題を解決し、持続可能な社会を構築するためのヒントが得られるであろう。ルフェーヴルの理論は、日常生活の中に潜む資本主義の論理を批判的に捉え、個人と社会の豊かな未来を描くための指針を提供している。

5. 中産階級と疎外

中産階級は、現代社会において重要な社会層を形成しており、その存在は社会の安定と繁栄に大きな役割を果たしている。しかし、資本主義経済の中で中産階級が直面する疎外の問題もまた深刻である。アンリ・ルフェーヴルは、資本主義社会における疎外のプロセスが日常生活にどのように浸透しているかを詳細に分析しており、中産階級もこの疎外から逃れることはできない。

日本の国内総生産（GDP）は世界第4位（2023年）の座にあり、国としての豊かさは維持されている。しかし、働き手個人の豊かさがないがしろにされている現状は、日本が実質的には貧困放置国家へと落ちぶれてしまったことを示している。日本で格差拡大が始まったのは1980年代であり、以降40年にわたって産業別、企業別、男女別の賃金格差は拡大し続けている。特に、1980年代から急速に労働現場に浸透した非正規労働者の存在が格差問題を固定化し、深刻化させた。正社員が担っていた仕事の一部を低賃金の非正規労働者に置き換えることで、格差が拡大していくのは当然のことである。

現代の日本社会は「格差社会」という言葉では実態を表せず、むしろ「階級社会」と呼ぶべきである。この階級社会では、出自や教育環境、就職時期の経済環境などによって階級が決まり、いわば「現代版カースト」ともいえる状況が形成されている。階級格差は親から子へ、子から孫へと世代を超えて連鎖し、格差が広がっていく。

中産階級の疎外は、消費文化の中で特に顕著である。中産階級は、一定の経済的余裕を持つことで、多くの商品やサービスを消費する能力を持つ。しかし、この消費活動は、しばしば自己実現や幸福の追求とは無関係に、社会的地位や他者との比較によって駆り立てられる。広告やメディアは、中産階級に対して「成功した生活」のイメージを絶えず提示し、そのイメージに合致するために消費を促進する。このようにして、中産階級は消費を通じて自己を表現しようとする一方で、消費活動が資本主義の論理に組み込まれていることを自覚することなく、疎外を深めている。

具体的な例として、1980年代から日本で始まった格差拡大は、中産階級に深刻な影響を与え続けている。この時期、非正規労働者の増加に伴い賃金格差が拡大し、階級格差が固定化されるようになった。特に新型コロナウイルスの感染拡大により、旧中間階級やアンダークラスが大きな打撃を受け、経済的困難がさらに深刻化した。このような格差の拡大は、日常生活の質を低下させ、人々の生活をさらに疎外させる要因となっている。

現代日本においても、中産階級の疎外は依然として問題である。例えば、教育や住宅に対する過度な投資が挙げられる。中産階級の多くは、子供の将来のために高額な教育費を負担し、有名私立学校や進学塾への通学を選択する。このような教育投資は、社会的な競争の激化や、他者との比較によって駆り立てられることが多い。また、住宅購入に関しても、都心部の高額な不動産を無理して購入することで、長期間にわたる住宅ローンを抱えることになる。これらの行動は、自己実現や幸福の追求というよりも、社会的な期待やプレッシャーに応えるためのものであり、結果的に中産階級の疎外を深めている。

さらに、現代の日本社会では、労働環境における疎外も深刻な問題である。多くの中産階級は、企業戦士として長時間労働や過労に耐えながら働き続けている。特に、経済的な安定や社会的地位を維持するために、高いプレッシャーを感じながら働くことが求められる。これにより、労働者は仕事に対する充実感や達成感を感じることなく、単に生計を立てるために働くことが多くなる。このような状況は、ルフェーヴルの疎外理論における「疎外」の概念を体現している。労働者は自分の労働が持つ本来の価値や意味を見失い、外部の目標や評価基準によって自己を評価するようになる。

また、現代の日本社会における中産階級の疎外は、デジタル技術の普及とも関連している。SNSやデジタルメディアは、自己表現の手段として広く利用されているが、同時に他者との比較や競争を助長するツールともなっている。中産階級の多くは、SNS上での自己表現を通じて社会的な承認を得ようとし、他者の成功や幸福を基準に自分の価値を測るようになる。これにより、デジタルメディアは疎外のプロセスを加速させ、個人が本来の自己を見失う原因となっている。

ルフェーヴルは、このような疎外からの解放を目指すべきであると主張している。彼は、日常生活の中で創造性や自発性を発揮し、自己実現を追求することが重要であると考え、例えば、地域コミュニティの活動や趣味の追求を通じて、個人が自己を表現し、充実感を得ることができる。地方創生の一環として行われている地域おこし協力隊の活動や、ワークライフバランスを重視した働き方改革も、この方向性に寄与する取り組みである。

新型コロナウイルスの感染拡大は、日本社会の階級格差をさらに広げる「副作用」を引き起こした。特に、旧中間階級とアンダークラスが大きな打撃を受けた。旧中間階級の世帯平均年収は、2019年には805万円であったが、2020年には678万円と、わずか1年で127万円も激減した。アンダークラスの世帯平均年収も、2020年には393万円と400万円を下回る水準まで落ち込んだ。このように、コロナ禍が中産階級とアンダークラスに与えた影響は甚大であり、格差が一層広がる結果となっ

た¹¹⁾。

中産階級の経済状況悪化は、西洋社会で深刻さも増している。これは多くの社会問題の原因となっている。イギリスの欧州連合（EU）離脱、フランスの「黄色いベスト」運動、アメリカのドナルド・トランプ（Donald Trump）元大統領のポピュリズム的政策など、様々な形で中産階級の経済的苦境と政治への不満が表れている。

2011年9月12日、ウォールストリートジャーナル（The Wall Street Journal）紙は、中産階級の減少により、プロクター・アンド・ギャンブル（Procter & Gamble）社が高級品と低価格品市場に注力していると報じた。その後、他のアメリカのメディアも同様の報道を行った¹²⁾。

アメリカ労働省労働統計局（U.S. Bureau of Labor Statistics）が2024年6月に発表した全国就業状況によると、失業率は5月の一年前の3.7%から4.0%にわずかに上昇したが、新型コロナウイルスのデルタ株の影響で、長期失業者は全失業者の20.7%を占めた。新規雇用の主な分野は、特に医療、政府、レジャー・ホスピタリティ、専門・科学・技術サービス分野が主導した。¹³⁾

現在、アメリカでは643万人が失業中で、そのうち37.4%が27週間以上の長期失業者である。労働参加率は61.7%を維持している。また、中産階級と下層階級の収入は1980年の63.6%から2019年には54.2%に低下し、富裕層の収入は34.2%から45.46%に上昇した。特に、最富裕層の収入増加が最も顕著である。

中産階級の疎外は、社会全体の問題として捉えるべきであり、個々の努力だけでなく、社会全体の価値観や制度の改革が求められる。ルフェーヴルの理論は、中産階級の疎外のメカニズムを明らかにし、それからの解放を目指すための視点を提供している。日本の具体的な事例を通じて、この理論を実践に応用することで、より自由で創造的な社会を構築するためのヒントが得られるであろう。

6. 言語と記号の支配

現代社会において、言語と記号は人々の思考や行動に大きな影響を与えている。特に、広告やメディアを通じて発信される言語と記号は、個人の意識や社会の価値観を形作る力を持っている。言語と記号の支配について考察することは、現代社会の権力構造や文化的支配のメカニズムを理解する上で重要である。

ロラン・バルトは、記号学を通じて、言語と記号がどのようにして文化や社会の意味を構築するかを分析した。彼は、記号が単なる意味の伝達手段ではなく、権力関係を反映し、それを再生産す

11) このデータは『週刊ダイヤモンド』2021年9月11日号「新・階級社会 上級国民と中流貧民」より参照。

12) <https://www.wsj.com/articles/SB10001424053111904836104576558861943984924>（ウォールストリートジャーナル、2024年6月30日）

13) <https://www.bls.gov/news.release/empsit.htm>（アメリカ労働統計局、2024年6月30日）

る役割を果たすと指摘する。バルトは特に、メディアや広告がどのようにして消費社会の価値観を広めるかを明らかにした。広告は商品そのものだけでなく、その商品が象徴するライフスタイルや価値観をも消費者に提示する。これにより、個々の消費行動が社会全体の文化的価値観を支える仕組みが形成される。

アンリ・ルフェーヴルもまた、言語と記号の支配が社会における権力構造を再生産するメカニズムを深く分析している。ルフェーヴルは、言語が単なるコミュニケーションの手段ではなく、社会的現実を構築し維持する役割を果たすと主張する。彼は、日常生活において言語と記号がどのように機能し、人々の意識と行動を規定するかに注目した。

日本においても、言語と記号の支配は顕著である。戦後の高度経済成長期から現在に至るまで、テレビや新聞、ラジオなどのマス・メディアが人々の日常生活に浸透し、社会の価値観やライフスタイルを形成してきた。例えば、バブル経済期には「金は天下の回りもの」というフレーズが広く用いられ、消費を奨励する文化が広まった。また、企業の広告戦略は、商品を購入することが成功や幸福の象徴であるというメッセージを強調した。このようなメディアの影響により、日本社会における消費行動や価値観が形成されてきた。

具体的な事例として、2024年6月3日に発覚した自動車メーカーの不正行為を挙げることができる。この事件では、ダイハツ工業などによる不正行為を受け、日本国土交通省が各社に調査を指示したところ、トヨタ自動車、マツダ、ヤマハ発動機、ホンダ、スズキの5社で不正が確認された。トヨタは衝突時に歩行者の頭部を保護する試験で虚偽データを提出し、マツダはエンジンの出力試験で制御ソフトの書き換えを行い、ヤマハは不適切な条件で騒音試験を実施した。ホンダとスズキもそれぞれ騒音試験やブレーキ試験での不正を行った。このような不正行為は、企業の信頼を損なうだけでなく、消費者の安全を脅かすものであり、社会的に大きな問題となった。

これらの不正行為は、企業が持つ権力とその言語的・記号的な支配の影響を如実に示している。企業は広告や広報を通じて自社の製品やブランドの価値を高める一方で、実際の製品の品質や安全性に関する情報を操作することで、消費者を欺いていた。このような行為は、企業の持つ言語と記号の力を利用して、消費者の認識や行動をコントロールしようとする試みである。ルフェーヴルの理論から見れば、これらの行為は日常生活における権力の非対称性を露呈し、社会的現実がどのようにして言語と記号によって維持され、操作されるかを示す一例である。

現代のデジタル社会においても、SNSやインターネットを通じて言語と記号による支配が続いている。SNSは、個人が自己を表現し、他者とコミュニケーションを取る場として機能しているが、同時に商業的なメッセージや広告が溢れている。インフルエンサーと呼ばれる個人がブランドや商品のプロモーションを行い、その影響力によって消費行動を誘導している。これにより、消費者は無意識のうちに特定の価値観やライフスタイルを受け入れるようになる。例えば、インスタグラム上での「インスタ映え」というトレンドは、特定の美的価値観やライフスタイルを広め、多くの若者がその価値観に基づいて商品を購入するようになっている。

また、日本の教育制度においても、言語と記号の支配が見られる。学校教育では、特定の価値観や歴史観が教科書を通じて伝えられ、生徒の思考や行動に影響を与えている。例えば、近代日本の歴史に関する記述は、国家のアイデンティティや価値観を強化するために利用されることがある。このような教育の影響により、生徒は無意識のうちに特定の価値観を受け入れ、それが社会全体の価値観の形成に寄与する。

具体例として、第二次世界大戦後の日本の歴史教育を挙げることができる。教科書では、日本の戦後復興や経済成長が強調され、それが国家の成功物語として語られることが多い。このような記述は、生徒に対して日本の経済的成功を誇りに思う価値観を植え付ける一方で、戦争の加害者としての側面をあまり強調しない傾向がある。これにより、生徒は一面的な歴史観を持ち、それが社会全体の価値観の形成に影響を与える。

ルフェーヴルは、言語と記号の支配が日常生活においてどのように機能するかを深く洞察している。彼は、言語が単なるコミュニケーションの手段であるだけでなく、社会的な現実を構築し、維持する役割を果たすと考え、言語を通じて伝えられるメッセージや記号は、個人の認識や行動を形成し、それが社会全体の秩序を支えるメカニズムとなる。ルフェーヴルは、日常生活の中で言語と記号がどのようにして権力関係を再生産するかを批判的に分析し、その支配からの解放を模索している。

日本の現代社会においても、言語と記号の支配からの解放は重要な課題である。例えば、メディアリテラシー教育を通じて、広告やメディアのメッセージを批判的に受け取る力を育成することが求められている。また、SNS上での情報の発信や受信においても、自己の判断力を持ち、情報を選別する能力が必要である。こうした教育や意識の変革が進むことで、言語と記号の支配から自由になる。

大衆文化の記号学研究において、比較対象としての準拠集団の消失という現象が指摘されている。バルトによれば、流行は自己準拠的な性質を持ち、その意味は循環論法的に成立する。例えば、ある衣服が流行しているのは、単にそれが流行として認識されているからに過ぎない。

この考え方では、絶対的な実在としての準拠集団は存在せず、意味は言語によって構築される。バルトは、物事の意味を知覚するためには必然的に言語の介在が必要であり、意味の世界は言語の世界に他ならないと主張する。

このような視点から、バルトは流行服飾の研究において、実際の衣服よりも流行雑誌の文章に焦点を当てた。彼によれば、言説なしには完全な流行も根本的な意味も存在しない。言説が実体を構築する。

ルフェーヴルもまた、言語と記号の重要性を指摘している。彼によれば、記号消費の日常生活世界を管理する官僚支配メカニズムは書記に基づいている。人口管理、官僚制度、日常生活の管理、私生活の合理化などは、すべて「言語と記号」システムに依存している。

言語と記号の言説は疎外支配の力を生み出し、これはフーコーの「言説・権力」の研究とも共鳴

する。ルフェーヴルは、言語と記号に基づく社会が恐怖主義へと向かう可能性を指摘し、言語と記号が社会的客体、知的記憶、命令と権威の象徴として機能することを述べている。

言語と記号は反復的、蓄積的な性質を持ち、規則のように自らの反復を強要する。それゆえ、ステレオタイプと抑圧を象徴し、これが恐怖主義社会の特徴となる。この視点は、現代社会における言語と権力の関係、そして日常生活における支配構造を理解する上で重要な示唆を与えている。

7. 日常生活の変革とその可能性

日常生活の変革とその可能性について考察することは、現代社会の課題を解決し、より豊かな社会を実現するために重要である。アンリ・ルフェーヴルは、日常生活が社会の変革の鍵であり、個人の創造性と自由を発揮する場であると強調している。彼の理論は、日常生活の質的向上を通じて、資本主義の疎外から解放される可能性を示している。

現代日本社会においてルフェーヴルの日常生活の変革と欲望の理論を考察することは、独特の視点を提供する。日本は高度に発達した資本主義社会であり、同時に固有の文化的背景を持つため、この理論の適用と限界を検討するのに適した環境である。

日本社会における「無産階級」の概念は、従来の西洋的な階級観とは異なる様相を呈している。日本では中産階級が広く、経済的な階級の境界が比較的曖昧である。しかし、非正規雇用の増加や所得格差の拡大により、新たな形の「無産階級」が形成されつつあると言える。これらの人々の欲望や不満は、必ずしも明確な形で表出されているわけではない。

日本社会における「欲望の反抗」は、しばしば個人主義的で内向的な形をとる。例えば、「草食系男子」や「ひきこもり」といった現象は、社会的期待や圧力に対する一種の消極的抵抗と解釈できる。これらは、ルフェーヴルが想定したような明確な政治的行動には結びつきにくいものの、日常生活の中での静かな変革を示唆している。

ルフェーヴルの理論が直面する「形而上学的な人道主義の困難」は、日本社会においてより顕著になる。日本の文化は、個人の欲望よりも社会的調和を重視する傾向があり、明確に定義された「人間性」の概念に基づく解放政治は受け入れられにくい土壌がある。

欲望の概念に関しては、日本社会は独特の複雑さを持っている。消費社会の発達により物質的欲望は満たされやすくなった一方で、精神的な充足や自己実現への欲求は必ずしも満たされていない。この状況は、ルフェーヴルやジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925 - 1995)、ピエール＝フェリックス・ガタリ (Pierre-Félix Guattari, 193-1992) が提示した欲望の形而上学的な解釈の限界を示しているとも言える。

フーコーの権力構造に基づく欲望の解釈は、日本社会の文脈でより適切に機能する可能性がある。日本の社会システムや企業文化における暗黙の権力関係は、個人の欲望形成に大きな影響を与えている。しかし、フーコーのアプローチも、日本人の精神性や文化的独自性を十分に説明できると思

えない。日本の文化は、儒家文化の影響を受けた調和や中庸を重視し、極端な超越性や個人主義的な欲望の表出を抑制する傾向がある。

しかし、欲望を「自然に基づく社会歴史的に形成された生産的な経験現象」として捉える視点は、日本社会の分析に有用かもしれない。例えば、戦後日本の経済成長期における物質的欲望の高まりと、バブル崩壊後の価値観の変化は、この視点から解釈することができる。

つまり、ルフェーヴルの理論を現代日本社会に適用する際には、日本独特の文化的背景や社会構造を考慮に入れる必要がある。欲望や日常生活の変革の概念は、より微妙で内在的な形で表れる可能性があり、西洋的な枠組みだけでは捉えきれない複雑さを持っている。日本社会における真の変革は、これらの独自性を踏まえた上で、欲望と日常生活の関係を再解釈することから始まるかもしれない。

8. まとめ

アンリ・ルフェーヴルの理論をもとに、日本の具体的な事例を通じて日常生活の変革とその可能性を検討してきた。ルフェーヴルは、日常生活が社会全体の矛盾や問題が凝縮される場であり、そこでの変革が社会全体の変革に繋がると考えている。この理論を日本の現実に適用することで、現代社会の課題を具体的に解決するための手がかりを見出すことができる。

日本社会では、労働環境の改善、地方創生、教育改革など、様々な分野で日常生活の変革に向けた取り組みが進められている。これらの取り組みは、ルフェーヴルの理論が示す疎外からの解放と一致するものである。個人が日常生活の中で創造性を発揮し、自発的に活動することができる環境を整えることで、資本主義社会の中で失われがちな自己実現や幸福を追求することが可能となる。

日常生活の社会学的批判は、単に疎外理論に依拠するだけでは不十分である。ルフェーヴルの疎外と人間全体に関する思想が抱える困難と矛盾は、疎外理論のみでは合理的な批判の枠組みを支えられないことを示している。

社会学的批判の本質は、経験的な研究に基づくべきであり、経験的事実が内包する矛盾の中に批判の切り口を見出す必要がある。この批判は、事実の矛盾に対する不満から生じる社会歴史的な選択であり、人間性に関する形而上学的な仮定から逸脱するものではない。むしろ、社会学の批判はこのような仮定を排除しなければならない。なぜなら、絶対的な本真性は経験的に証明することができないからである。

日常生活の最大の矛盾は、意識層の一見自明の特徴と、無意識層の社会歴史的な構築および抑圧の間に存在する。つまり、日常生活は二重の原則に従っている。したがって、日常生活の矛盾の核心を把握することが重要である。

この二重性は、無意識が作り出す意識の幻想と、無意識的に働く実際の社会歴史的法則との間の不一致が、社会の暴力を明らかにする。これは、人々が自分たちの現実を正確に理解していないこと、

自分たちが当然と信じる現実が実際にはそうではないこと、自分たちの欲求に抑圧的な力が含まれていることに気づいていないことを意味する。

この日常生活の二重の原則が続く限り、批判の可能性は常に存在する。この批判は経験的現実に基づくものであり、現実の矛盾から出発する規範的要求を含む。それは矛盾状態の欺瞞性と暴力を批判し、人々にこれらを明らかにしようとする。

このアプローチによって、日常生活の社会学は社会歴史的な啓蒙の役割を果たし、日常の人々を目覚めさせ、日常生活の変革の動力を活性化することができる。存在の覚醒は存在の選択を可能にする。

日本社会に当てはめると、この理論は特に興味深い視点を提供する。例えば、日本の「サラリーマン文化」や「就職活動」などの慣行は、多くの人々にとって自明のものとして受け入れられているが、実際にはそれらが内包する抑圧的な側面や社会的不平等を生み出す構造に気づいていない場合が多い。

また、儒家倫理に依拠する日本の「おもてなし文化」や「和を以て貴しとなす」という価値観も、表面的には美德として捉えられているが、その裏にある過度の自己犠牲や個人の欲求の抑圧といった側面を無意識のうちに受け入れている。日常生活の社会的批判は、これらの無意識に受け入れられている慣行や価値観の裏側にある矛盾や問題点を明らかにし、人々に新たな視点を提供する。それによって、社会の構造的な問題に対する認識を深め、変革への可能性を開く。この批判的アプローチは、日本社会が直面する様々な課題として、長時間労働、ジェンダー不平等、若者の社会的孤立などに対して新たな視点を提供し、これらの問題の根本的な原因を理解し、解決への道筋を見出すための重要なツールとなり得る。

参考文献

1. ロラン・バルト（篠沢秀夫訳）1967年『神話作用』現代思想社
2. アーヴィング・ゴッフマン（石黒毅訳）1974年『行為と演技：日常生活における自己呈示』誠信書房
3. アンリ・ルフェーヴル（田中仁彦訳）1978年『日常生活批判：序説』現代思潮社
4. ハロルド・ガーフィンケル（山田富秋訳）1987年『エスノメソドロジ-：社会学的思考の解体』せりか書房
5. ウォルター・リップマン（掛川トミ子訳）1987年『世論（上）（下）』岩波文庫
6. ジル・ドゥルーズ（平井啓之訳）1992年『差異について 増補新版』青土社
7. フェリックス・ガタリ（杉村昌昭、穂藻充訳）1994年『精神分析と横断性：制度分析の試み』法政大学出版局
8. ゲオルク・ジンメル（居安正訳）1996年『貨幣の哲学（新訳版）』白水社
9. アルフレッド・シュッツ（佐藤嘉一訳）1997年『社会的世界の意味構成』木鐸社
10. アンリ・ルフェーヴル（斎藤日出治訳）2000年『空間の生産』青木書店
11. ミシェル・フーコー（田村俊訳）2020年『監獄の誕生（新装版）：監視と処罰』新潮社
12. ピエール・ブルデュー（石井洋二郎訳）2020年『ディスタンクシオン〈普及版〉I』藤原書店

13. ジョージ・ハーバート・ミード（山本雄二訳）2021 年『精神・自我・社会』みすず書房
14. エリアス・カネッティ（岩田行一訳）2022 年『群衆と権力』（上下改装版）法政大学出版局
15. 斎藤幸平（2022 年）『人新世の「資本論」』集英社新書

The Interaction Between Everyday Life and Contemporary Society: Alienation and Possibilities for Regeneration in Capitalist Society

Wei LEE

ABSTRACT

This paper explores the transformation and potential of everyday life in contemporary society, drawing on Henri Lefebvre's theory. It begins by explaining how everyday life reflects and reproduces the overall structure and values of society, detailing Lefebvre's theory of alienation. Next, it analyzes how consumer culture and the spread of digital media alienate everyday life through specific examples. Specifically, it examines the revitalization of community and the realization of sustainable lifestyles through urban agriculture and third places in Japan. It also highlights educational reforms, presenting examples of efforts to foster students' creativity and autonomy. Furthermore, it considers the impact of regional revitalization efforts on local communities, emphasizing the importance of improving labor conditions and regional regeneration. Ultimately, it summarizes how these initiatives contribute to the qualitative improvement of everyday life and the liberation from alienation in capitalist society. The paper demonstrates that Lefebvre's theory provides a crucial perspective for addressing contemporary societal issues.